

『魅力発見部会』

知立の歴史文化をまちづくりに活かすための提言書

部会長 南 祝夫

委員 秋田 隆

粕谷 國夫

小橋 和昭

鈴木 彰治

辻 克彦

藤井 敏彦

知立の歴史文化をまちづくりに活かすための提言書

テーマ「動けば光る宝のまち知立」

魅力発見部会では、テーマ「動けば光る宝のまち知立」に基づき、キャッチフレーズを「動く・集める・繋ぐ」と定めて様々な活動に取り組んだ。取り組みにより、知立には長い歴史を持つ数多くの名所旧跡があることを改めて確認した。また歴史上に名を残した人物の業績が、今なお知立市に存在することも再発見することが出来た。高校生たちによる先進的な活動にも目を奪われた。加えて、知立市観光協会を始めとする関係団体、並びに市担当者とも意見交換を重ねることにより、研究協議に深みを増すことが出来たのは幸いであった。

知立市の特色として、国土の中央に位置し、気候温暖で、交通至便、さらに歴史文化の豊かさを上げることが出来る。このことは、まちづくりに必要な条件はすべて整っていることを意味する。平成17年3月には知立市まちづくり基本条例が制定されて、市議会・市が「協働によるまちづくり」に大きな期待をよせていることは、市民にとって大変心強いことである。

魅力発見部会が入手した情報や資料を総合的に研究協議した結果、本年度の提言に当たっては、まちづくりに大切な「ヒト・モノ・コト」という観点から、次の3項目を提言する。

【提言事項】

- 1 先人の偉業（内藤魯一没100年）を再発見すること
- 2 「食」の歴史を掘り起こして名品化すること
- 3 まちの魅力発信方法を工夫すること

【提言 1】

先人の偉業（内藤魯一没100年）を再発見すること

明治時代における知立の産業振興を始めとして、政治・教育等にも大きな功績を残した内藤魯一にスポットライトを当てたい。本年は、内藤魯一没100年の節目の年でもあり、経費費用を抑え、継続的に活動を行う。

(1) 内藤魯一についての広報・啓発（活動の足跡や地域発展に尽くした功績を伝える）

- ① 「広報ちりゅう」やホームページへの掲載
- ② 地元の「KATCH」や「知立くらしのニュース」での報道
- ③ 図書館・民俗資料館との連携による展示
- ④ 内藤魯一の紙芝居製作、など

(2) イベントを通しての広報・啓発（健康ウォーキングのコースに内藤魯一像のある猿渡公民館を取り入れる）

- ① 知立市が主催するウォーキング
- ② 民間が主催するウォーキング
- ③ 知立市立小学校の遠足、など

(3) 学校教育・生涯学習を通しての広報・啓発

- ① 小学校・中学校の総合学習での対象化
- ② 内藤魯一の紙芝居鑑賞、演劇発表、など

(4) 内藤魯一の命日（1911年6月29日）行事の開催

上記4項目を実施するために特に重要なのは、仮称「魯一を盛り上げ隊」の募集及び結成である。市教育委員会、市観光協会等とのタイアップも大切なことである。

なお、内藤魯一の生涯（概略）は、付属書1として記載してある。

【提言 2】

「食」の歴史を掘り起こして名品化すること

知立には、江戸時代の「本陣料理」や「牛田の大豆煎り茶屋」などが文献に記載されている。また、おふくろの味としては「煮味噌」「どて煮」「ホルモン」などがあり、食堂やドライブイン、弘法さんの縁日などの定番商品となっている。これらに創意工夫をこらせば、立派なご当地グルメになり得る。

(1) ご当地グルメ「どて井」への取り組み

「食」はまちづくりのオールマイティ。ふるさとの味の研究と発展に、早急に取り組むべきである。

- ① 知立どて井学会の立ち上げ
- ② 「どて井マップ」の作成
- ③ どて井レシピの公開
- ④ パイロット店舗の支援、など

(2) 大あんまきの工夫

創案（1889年）されてから120年余。若い世代からも歓迎される新商品を開発することが好ましい。

- ① 4色のおあんを巻いた「四季あんまき」
- ② ロールケーキ風の「ロールあんまき」、など

(3) 宿場まち sweets への挑戦

近隣の名産、安城のナシ、碧南のイチジク、豊田・岡崎・みよしのブドウを活かしたCHIRYU de sweetsづくりに挑む。

- ① 梨をベースにした「坂ナシ・プリン」
- ② 「松ぼっくりをイメージした「ミルフィーユ・松ぼっくり」
- ③ 期間限定（1～3月）した「合格サブレ」、など

まちを代表する顔のひとつは「食」。ふるさと自慢をするときに欲しいのは、まず郷土の名物料理。かきつばたや花しょうぶを見物に訪れた観光客は、土地の名物料理にも目を向けるだろう。

雛祭の頃には、知立市の学校給食でも「いがまんじゅう」が提供されるが、郷土の味覚と季節感という意味からも大変好ましい。かつて、「知立きしめん元祖説」を取り上げて実現させたことがあり、このアイデアにも再度挑戦したいものである。

【提言 3】

まちの魅力発信方法を工夫すること

パソコンやケータイなどのIT機器による情報発信の利点と、手づくりや手書きによる情報発信の温かさを大切にしたい。

(1) 「まちの魅力発信（発掘）人」の発掘

絵手紙やフォトレターなどによる発信上手や、歴史・文化に詳しい暦男・歴女を発掘するとよい。

- ① 絵手紙展の開催
- ② フォトレター展の開催、など

(2) 「まちの語り部」の育成

地元の魅力を最もよく知っているのは、そのまちの住人。地元の魅力を語ることの出来る人材の育成と発掘が大切である。

- ① 古老の話を聴く会や、我がまち座談会の開催
- ② 子どもたちの総合学習の成果を聞く会の開催
- ③ 高校生は語る会の開催、など

(3) 「観光（まちづくり）アナリスト」の養成

大きく変化する時代を捕まえて、情報の収集・分析をする知的好奇心にあふれたアナリストの養成が急務である。

- ① アナリスト知立学会の開催
- ② アナリストの寺子屋の開催、など

(4) 「今こそ写真力」の活用

速報・記録・芸術などに優れた写真は、これからもまちの魅力発信に欠かせないツール（手段）である。

- ① 「松並木・一里塚写真展」の開催
- ② 「撮り鉄（鉄道写真）写真展」の開催
- ③ 「かきつばた・花しょうぶを写す会」の2部制検討など
1部／ミスかきつばたを写す会（従来通り）
2部／1部以外の写真展開催

かきつばた・花しょうぶが咲いているのは4～5月に限られているが、一里塚や松並木は四季折々の撮影が可能。秋季の一里塚に咲く彼岸花、冬季に菰（こも）の巻かれた松並木は特に美しい。

【まとめ】

新聞・テレビを始めとするメディアは、連日のようにくむらおこし・まちづくり・地域の活性化等々の取り組みを伝えている。ご当地グルメはその筆頭であるが、その土地の歴史文化を無視しての取り組みはあり得ない。

幸いにも知立市には、長い歴史の積み重ねと文化活動の蓄積がある。この歴史と文化が、これからも、まちづくりの強固な基盤となることは間違いない。

「動けば光る宝のまち知立」を目指して、引き続き「動く・集める・繋ぐ」ことが出来れば、知立市の将来は限りなく明るい。

しかしながら、時代を先取りして取り組むことが必要とされる昨今、従来型のシステムや組織では限界がある。従って、魅力発見部会の活動を終えるに当たり、知立市に切に希望するのは、提言を実現するために下記の施策に取り組むことである。

- (1) 時代の変化に立ち向かう柔軟な発想と実行力に富んだ組織（仮称／まちの底力「アクション知立」）を立ち上げること
- (2) 知立市観光協会・知立市商工会などの関係団体が、連携を目的とする協議会を設置すること
- (3) 知立市役所内に、協議会を担当する部署及び担当職員を配置すること
- (4) 既存ボランティア団体との連携や、新規団体の設立などに積極的な支援を行うこと

添付してある付属書1～4は、知立市の将来を構想するために極めて示唆に富んでいる。旗印＜協働によるまちづくり＞に集う次年度まちづくり委員会、そしてまちづくりに関わる団体・組織等の貴重な資料になるものと思われる。

付属書1には内藤魯一の生涯（概略）が記されており、付属書2には、知立市制50周年までの周年行事一覧表が載せられている。また付属書3には、よきライバル関係にある近隣市町の現状が述べられ、付属書4には、知立市に吹いた時代の風が記録されている。

「グローバルに考え、ローカルに行動せよ」と言う。我がまち知立を概観する時の参考資料等にしていただきたい。

付属書1 内藤魯一の生涯（概略）

（1）生い立ち

内藤魯一は、江戸末期から明治という大きな変革の時代を生き抜いた人である。内藤家は代々福島の譜代大名板倉氏に仕え、320石を受ける家老の家柄であった。父・次興、母・マキの長男として出生（1846年10月6日生）、本名は次功、幼名は詮太郎、通称は豊次郎。

（2）重原時代

1869年（明治2）、藩主・板倉勝達に従って三河国重原に移住。内藤家は刈谷市小垣江の江坂邸に落ち着く。大参事（家老職）となって、藩債処理と生計維持に全力を尽くす。茶畑や桑畑の奨励、養豚や養鶏の取り組み、金融機関の設立など地域社会へも大きな功績を残す。また「三河交親社」の結成、「大日本憲法草案」を起草したのもこの頃のことである。

（3）愛知県議時代

1882年3月25日、東海道遊説中の板垣退助一行を知立に招いて懇親会を開催。引き続き遊説に付き添った際に起きたのが、岐阜での「板垣退助遭難事件」である。有名な「板垣死すとも自由は死せず」はこの時に発せられたという。明治用水の開削、安城農林学校（現在、県立安城農林高校）の開校、名古屋港の開設、東海毎日新聞の創刊にも関わっている。

（4）衆議院議員時代

1905年、補欠選挙で衆議院初当選。現職で逝去するまで国会議員を勤める。1909年、病を得て帰郷。知立町金山（現在、豊田市駒新町金山）の自宅で逝去、享年66歳（1911年6月29日逝去）。菩提寺は、龍江禅寺（刈谷市小垣江町）である。

（5）魯一像の略歴

- 1936年4月、内藤魯一銅像が猿渡小学校校庭（旧内藤魯一邸）に建立。
- 1942年、金属供出のため取り外されて台座のみが残る。
- 1952年11月、石像として再建されて今日に至る。

（6）魯一関連の施設等

- 知立市歴史民俗博物館（常設展示）
- 知立市図書館（『知立市史』他の資料）
- 内藤魯一像（猿渡公民館）
- 池鯉鮒庵／板垣退助ゆかりの茶室（知立公園）
- 終焉の地石碑（豊田市駒新町金山）
- 龍江禅寺／菩提寺（刈谷市小垣江町）

（注）内藤魯一の詳細については『知立市史（下）』等を参照のこと。

付属書2 知立市周年行事一覧表

- 2011 池鯉鮒宿開設410年(1601)「東雲座」開業120年(1891)
明治用水西井筋完成120年(1891)内藤魯一没100年(1911)
知立市内電話開通100年(1911)
- 2012 芭蕉句詠320年<不断たつ池鯉鮒の宿の木綿市>(1692)
知立市内電燈点灯100年(1912)中央通り商店街歩道・アーケード完成40年(1972)知立南中学校設立30年(1982)
- 2013 知立まつり開催360年(1653)
知立駅(高架上)開業90年(1923)
市花(かきつばた)・市木(けやき)制定40年(1973)
- 2014 東海道松並木設置410年(1604)
知立からくり開催290年(1724)
上水道通水50年(1964)
- 2015 御手洗池埋め立て120年(1895)三河知立駅開業100年(1915)
観光協会設立60年(1955)
八橋伝承地県指定50年(1965)
- 2016 シーボルト宿泊190年(1826)
内藤魯一銅像建立80年(1936)
ミスかきつばた募集50年(1966)
- 2017 知立山車神楽開始270年(1747)知立中学校設立70年(1947)
知立市章制定60年(1957)知立団地完成50年(1967)
竜北中学校設立40年(1977)
- 2018 三河県設置150年(1868)
新市庁舎完成40年(1978)
知立高校分離独立60年(1958)
- 2019 大あんまき創案130年(1889)
知立駅・知立タワー完成60年(1959)
八橋かきつばた園完成50年(1969)
- 2020 東海道、国道1号線と名称変更100年(1920)
知立市制50周年(1970)南陽通り開通50年(1970)
体育協会設立60年(1960)文化協会設立50年(1970)

付属書3 近隣市町の現状

豊田市足助町で行われている「中馬のおひなさん」は、シャッター通りを見事に活性化させた事例として秀逸。すでに全国的な催しに成長しており、毎年訪れる常連客も多い。観光収益を、「木彫りの看板」設置の資金補助に回しているのも参考になる。また豊田市藤岡町の「四季桜」も研究のポイントから外せない。「とよた五平餅学会」の存在も要注意。

刈谷市の「刈谷ハイウェイ・オアシス」は研究すべき存在だ。デラックス・トイレ、観覧車、歩行者ループ、温泉施設、遊園地、産直市場と、時代の先端に行く先進性には脱帽するしかない。大人の社交場復活を狙った繁華街での「カリアンナイト」からも目が離せない。刈谷商工会議所が刈谷新名物として売り出し中の「坊ちゃんカボチャ」の動向も気になる。

安城市小川町の「農家レストラン&ショップ、太陽の味」が興味深い。“幸せの黄色いハンカチ”を目印にするなど抜け目がない。さらには、安城名物の〈うどん〉と〈どて井〉をセットにしたランチ定食まであるのだから、「太陽の味」、恐るべし。「安城デンパーク」も大改修を施して、今年度は年間入場者50万人奪回を狙っている。

高浜市の「とりめし学会」は、B-1グルメを視野に入れて準備が進んでいるという。メニューも11品目あるというから驚く。児童生徒が作った瓦製ランプを並べた「鬼あかりまつり」も、地元産業とタイアップして好評のようだ。ペットボトル製ランプも入れると、2000基の「鬼あかり」が一般道を幻想的に照らしている。

碧南市では、冬の恒例行事として定着してきている「きらきらウオーク」が、今年度も約3キロにわたって開催。中学校1校、高校2校が〈光のオブジェ〉を作成して参加しているのも好ましい。またスタンプカード・ビンゴカードも発行されて、商店街にも売り上げ効果をもたらしている。発売中の「碧南ベスト逸品（みぷりん、海老ほのか）」の動向や、いかに。

岡崎市の「おかざき観光コンベンション研究会」が、FC（フィルム・コミッション）を検討中。ジャズ・ストリートに続いて観光に力を入れていることが分かる。ご当地グルメを狙った「岡崎発三河流八丁味噌のまぜそば」が好調のようだ。藤川町では「むらさき麦まつり」を基点に、むらさき麦の焼酎やクッキーが商品化に成功。饅頭も試作を終えたとのこと。

付属書4 知立市に吹く時代の風

- 2003年 「観光立国行動計画」閣議決定
(平成15)
- 2004年 「刈谷ハイウェイ・オアシス」開業
(平成16)
- 2005年 「愛知万博／愛・地球博」開催
(平成17)
- 2006年 「名古屋ミッドランド・スクエア」開業
(平成18)
- 2007年 「東海道五十三次」 ブランド化計画
(平成19)
- 2008年 「愛知県観光振興基本条例」制定
(平成20)
- 2009年 「武将のふるさと愛知100選」
(平成21)
- 2010年 「愛知おもてなし県民会議」開催
(平成22)

2005年、「愛知万博」開催の傍らで審議・決定された「知立市まちづくり基本条例」。引き続き委員が公募され、第1回まちづくり委員会が開催された。最初の提言が行われた2006年は、奇しくも知立町制100年。新しい時代へのチャレンジ精神に満ちたスタートであった。